

## デ・キリコ展

(東京都美術館)



昨年、東京都美術館で「デ・キリコ展」を見た。これぞ奇才といふべき謎解きのような作品群に圧倒された。形而上絵画といふものらしい。形而上とは「感覚的現象として存在することなく、それ自身超自然的な、ただ理性的思惟によつて捉えられる、云々」と辞書にあり、少し分かつた気になる。一つ一つはなじみのある物が、なじみのない配列や形や色彩で置かれ、どうだと言わんばかりに目の前に現れる。一体これは何だ何だ、と消化しきれないまま次に進んでいく。意味を解こうとすると苦しい。しかし意味は分からなくても心に静かに残っている作品のイメージがある。誰もいない広場に建物とその影が大きく占めているものや、奇妙な塔の背景に青とも緑ともつかないような色で描かれた空など。またのつぺらぼうの卵のような首をもつ人物が顔を寄せ合つて(顔はないのだが)何を話しているのだろうと思わせるものなど。自分が今いる世界を超越した大きな謎や驚きに満ちている。不思議な時空に遊んだひとときだった。

(斉藤淳子・長野)

## 「小林研一郎指揮 ハンガリー・ブダペスト交響楽団」

(2024・6・30 石川県立音楽堂)



この日のメインはチャイコフスキーの交響曲第五番。小林研一郎(以下「コバケン」)は自信のある曲しか振らぬ。その中で第五の演奏回数はダントツ。ムラヴィンスキーを別格にすれば、コバケン以上の演奏を聴いたことがない。果たして演奏は期待以上。第一楽章からエネルギー全開、トランペットの力と彩、愕然とテンポが落ちる第二主題、<sup>コランダ</sup>終結部のアツチエレランド、こんな緩急はない。第二楽章は感情たつぷり。柔らかに人間愛を歌う。序奏主題再現の後のピッチカートにはれはれ涙する。第三楽章に入り、ファゴットが歌う主題のリタルダンドに震えとまらず。楽器や表情の彫りの深さよ。終楽章の迫力、実在の響きは第一楽章以上。突進の充実と荒れ狂うテンポ、総奏終了に被さるように「ブラボー」の嵐、立ち上がる人あまたの万雷の拍手。私は鳥肌たち、感涙で視界もぐしゃぐしゃ。終演後、楽屋から出たコバケンさんにプログラムに懇ろにサインを頂いた。さらに私の肩に手を置き写真に納まつて下さった。

(早川昌成)